

1 出題の意図

高等学校を卒業する世代の者の経験は、社会的な経験が豊富な「大人」に比べれば限定されてはいるが、何かと「本気に向き合う」ことが求められた経験や、振り返ってみた時にある程度客観的に「変化」を認めるような経験も、一定程度はあるだろう。

本出題においては、小論文執筆にあたり、ルーティン化した日常生活の中からそのまま材料を探せるようなものではなく、振り返ってみた時に自身にとって重要なことが生じていた経験を見つけ出して、言語化することを求める課題を設定した。みずからの生活を振り返り、一定程度客観的な理解をすることは、大学で学ぶにあたり、前提として求められるものであろう。

評価における最も重要なポイントは具体性である。解答者自身の経験でない、さまざまなメディアのコンテンツから得たような内容、あるいは抽象的な思考でひねり出したような内容では、解答者自身がどのように生活を振り返り、それをどう言語化するかという課題に向き合う姿勢の評価がでなくなってしまうのだ。

次に重視した点は、課題の総合問題的部分への対応である。出題は「あなたが「本気で向き合う」ことで変化を自覚した経験」を問うものである。「本気で向き合う」と「変化」は一般的には結びついて考えられる内容ではない。大学入試選抜の小論文問題として、別々に考えられることを経験の中から引き出した上で、2つの内容をいねいに関係づけて記述することを求めた。「経験」を想起する中で、「本気で向き合う」と「変化」が結びついて思い出されれば、書くことは困難ではないが、そうでない場合は一定程度困難な課題になったはずで、そこをいねいに思考することで切り抜ける力量を判定しようとした。

六〇〇字という字数は、三段構成（序破急型）・四段構成（起承転結型）が可能なので、段落構成の効果について意識があるかどうか、評価のポイントとした。問題提起↓本論↓結論という流れをふまえ、1つのまとまった文章として読ませることができかどうかを評価した。

未熟な日本語表現、表記ミス等は、自身の考えを正確に表現するにあたり瑕疵になると考え、これらについても減点評価の対象とした。

2 解答例

みずからの変化に繋がるほどの本気で向き合う経験は、人生においてそれほど多くないだろうし、思い出せなくなっているものもきっと多い。今回は、課題をあたえられて最初に想起した、高校で受けた小論文指導について書くことにする。

どのようなものであれ、指導というものは長所よりも短所の指摘を中心におこなわれる。小論文指導の中心は、言葉を表面的に破綻なく記述する技術ではなく、文章の根幹にある価値観や文体の方であった。表記ミスや文法の乱れなどであれば、学びにそれほど痛みは伴わないが、私がこれまで生きるなかで形成してきた、一定の自負のある価値観や文体の短所が指摘されるのは、（それが客観的に正しいことだとわかっていても）苦しかったし、指導する先生に心の中で反発するような感情がなかったとも言いきれない。小論文を学びながら、私が本気で向き合ったのは自分であり、そして、先生という他者であった。

私が先生の指導を一定期間のあいだ積極的に受けることができ、プラスの変化⇨成長を感じられるようになったのは、指導を受ける私に対して、先生がひとりの人間として敬意を示してくれたからだと思う。真の変化は自分自身と向き合い、痛みを伴いながら変化させることが必要となる。これを実現するためには、敬意をもって理解しあえる存在が必要ではないかと思う。成長に必要な自己との対峙を支えてくれるのは他者なのだと考える。